

## &lt;書 評&gt;

『英語で聞く・英語で読む  
オバマ「変革」の時代』  
(コスモピア, 2008年, 167頁)

軽 部 恵 子

本誌は、『多聴多読マガジン』1月臨時増刊とあるように、オバマアメリカ大統領候補（当時）の演説を中心に編纂し、演説を録音したCDを付録につけた英語学習者のための雑誌である。本誌のみならず、オバマ大統領の話す英語や彼の人生を取り上げた「オバマ本」は大変な売れ行きぶりという。

評者がアカデミックではない本誌を書評に取り上げた理由は3つある。第1に、アメリカで初めて有色人種の大統領が誕生し、アメリカ政治外交への関心が世界的に高まっている。今回の歴史的な選挙は、今後何度もアメリカ史やアメリカ政治の本で引用されるであろう。民主・共和両党の主要候補者がどのようなレトリックを展開し、本選挙を戦ったのか、本誌は貴重な資料を提供している。

第2に、2008年のアメリカ大統領選挙ほど長く、かつ詳細に報道された選挙はかつてなかった。アメリカ大統領選挙は直接選挙ではなく、一般有権者が選出した大統領選挙人が大統領を選出する間接選挙である。選挙人の投票（2008年は12月15日）まで、最終結果は確定しない。だが、このことが広く知られるようになったのは、2000年11月の大統領選挙であろう。この時、一般投票獲得数にまさる民主党のアル・ゴア副大統領（当時）が、大統領選挙人数を僅差で制した共和党のジョージ・W・ブッシュ・テキサス州知事（当時）に惜敗した。

第3に、2008年秋に発生した金融危機を挙げたい。核開発や物理学、確率論の理論を基礎に構築された金融工学によって、様々な金融商品が開発された。金融危機の最大の原因は、本来住宅ローンを借りるだけの年収がない人々にローンを貸し出すため、リスクを証券化して分散したサブプライム・ローンである。なぜそのような「錬金術」が可能になったのか、評者も当初その仕組みを理解するの

に苦勞したが、本誌は簡潔かつ正確でわかりやすい用語集を提供している。

本誌は、大きく分けて3部から構成される。初めに、2008年の大統領選挙を振り返り、大統領選挙の仕組みと流れ、予備選挙の経緯、各党の党大会と本選挙、投票日前日から当選予定者が勝利を宣言するまでの両候補の発言、そして最終結果が掲載されている。次に、「アメリカと世界を読み解く英語キーワード250」と題して、金融・経済、環境・エネルギー、外交、アメリカ国内問題のキーワードを計250取り上げ、要点を押さえた解説文がつけられている。

3番目に来るのは、本誌の核心ともいべき「激闘! 2008 声で追うアメリカ大統領選挙」で、主要大統領候補者の演説のトランスクリプトが解説とともに掲載されている。別添のCDで演説を聴くこともできる。収録された演説は、各党の候補者を選出するための予備選挙で、多数の州（とくに人口の多い大票田）で投票日となるスーパー・チューズデー（2008年は2月5日）に始まり、民主党予備選挙の終結、2008年夏の民主・共和党大会における候補者の指名受諾演説、本選挙での3度のテレビ討論会、オバマ大統領当選予定者の勝利宣言などである。

ここで注目すべきは、何といってもヒラリー・クリントン候補の撤退宣言であろう。同氏の民主党予備選への出馬は、アメリカ史上初の女性大統領誕生の可能性を大いに高めた。それゆえ、予備選挙からの撤退宣言も注目を集めた。クリントン候補を支持した多数の女性票の行方が、オバマ候補の本選挙勝利にかかっていたからである。もちろん、クリントン氏にとっても、自身のアメリカ政界、とくに民主党内における評価を決める重要な演説であった。周知のごとく、クリントン氏は自身に投票した人々、とくに女性有権者に感謝しつつ、オバマ候補の下に民主党支持者が団結するよう呼びかけ、それに成功した。

次に、本誌に対していくつか指摘したい。初めに、アメリカ大統領選挙や大統領候補のスピーチに関する本にもかかわらず、イギリス英語のスペリング（綴り）を採用した箇所が散見された。たとえば、democratisation (p. 46), securitisation (p. 48) である。執筆者や編者にどのような意図があったのか不明だが、アメリカ大統領の英語についての本なのだから、アメリカ英語のスペリングに統一した方がよいであろう。

第2に、外国の地名や人名のカタカナ表記について取り上げたい。たとえば、「第26代セオドア・ルーズベルト」(p. 37) だが、『広辞苑』では「ルーズヴェルト」、歴史教科書や参考書を数多く出版する山川出版社は「ルーズヴェルト/ロー

ズヴェルト」を採用する。原語の綴りは Roosevelt で、最初の母音の発音をあえて日本語で表記すると「ロウ」である。また、メディアでは一般に「ヴ」を使わないが、多くの中高校生や大学生が本誌を読むことを考え合わせると、カタカナの表記を一考すべきではないか。

それから、南北戦争の激戦地として有名な「ゲチスバーグ」だが、『帝国書院』などの地図では「ゲティスバーグ」と表記する。地名についても、地図が「ジュネーヴ」と、新聞が「ジュネーブ」とするなど、表記法に違いがあるのは確かだが、無用の混乱を防ぐために地名のカタカナの表記法は地図に統一すべきではないか。この点は、増刷時にぜひ変更してほしい。

第3に、2大政党の大統領候補によるテレビ討論会の司会者についても若干の解説を入れてほしかった。テレビ討論会は計3回行われるが、討論会の司会者に選ばれることはジャーナリストとしてこの上ない名誉とされる。司会者は民主党、共和党のどちらかにいかなる意味でも「加担」せず、公平な立場で議論を喚起し、アメリカ国民の最も知りたいことを質問していく。質の高いジャーナリストの存在が、アメリカの大統領選挙をより一層興味深くするともいえる。

たとえば、第1回討論会（2008年9月26日）の司会を担当したジム・レーラー（Jim Lehrer）は、アメリカ PBS（Public Broadcasting Service）のニュース番組 The News Hour with Jim Lehrer のアンカーマンを長年勤めている。この番組は、賛成反対の立場の人々を読んで意見を求めるが、討論者が声を荒げる場面はまずない。番組の質の高さと視聴者の層がそうさせるのだろう。ちなみに、この番組（約45分）はNHK衛星第1放送で、火曜日から金曜日の午後2時15分から視聴できる。

以上の指摘にもかかわらず、評者は本誌を非常に高く評価し、強く推薦したい。本来、出版社が意図した英語の練習用テキストとしてはもちろん、コミュニケーション論、メディア論、アメリカ政治、アメリカ外交の参考文献として大いに活用できる。本誌を通じて若い読者、とくに大学生が英語を上達させ、くわえて英語のレトリック、アメリカの歴史、アメリカ人のメンタリティーなどを総合的に学ぶことができよう。

末尾に、英語を文化と歴史の両面から理解し、英語を総合的に学べる書籍を掲げた。新書やビジネス書が中心なので、誰にでも入手しやすいであろう。リストには、西山千、村松増美、小松達也ら往年の名同時通訳者による著作と、聖書を

基に英語の意味や歴史を解説する本が必然的に入った。文化的背景や歴史を理解した上で外国語を学んだ方が、外国語学習が単語の機械的な暗記に終始することはなくなり、また、誤訳やニュアンスの取り違えをなくすことが容易になる。とくに学生諸君にはぜひ参考にしてほしい。

<推奨文献>

- 秋澤公二『アメリカ人は英語で考えて会話する』河出書房新社 2000年  
石黒マリローズ『聖書でわかる英語表現』岩波書店 2004年  
石黒マリローズ『聖書の英語の物語』日本放送出版協会 2004年  
大西泰斗, ポール・マクベイ『NHK 3か月トピック英会話 ハートで感じる英  
文法』日本放送出版協会 2006年  
木下和好『聖書がわかれば英語がわかる!』ダイヤモンド社 2001年  
講談社インターナショナル編『これを英語で言えますか』講談社インターナシ  
ョナル 1999年  
講談社インターナショナル編『続これを英語で言えますか』講談社インターナシ  
ョナル 2001年  
小松達也『通訳の英語 日本語』文藝春秋 2003年  
小松達也『訳せそうで訳せない日本語』ソフトバンククリエイティブ 2008年  
西尾道子, バーバラ片岡『旧約聖書の英語』講談社 2000年  
西尾道子『新約聖書の英語』講談社 1999年  
西山千『真珠湾と日系人: 日米・友好と平等への道』サイマル出版会 1991年  
西山千『新・誤解と理解: 日米のコミュニケーション』サイマル出版会 1991年  
橋爪大三郎『アメリカの行動原理』PHP 研究所 2005年  
平野次郎『図解英語ものがたり』中経出版 1999年  
本間正人『英語で鍛えるロジカルシンキング!』日経 BP 社 2002年  
松尾弑之『大統領の英語』講談社 2002年  
ピーター・ミルワード『英語の名句・名言』講談社 1998年  
村松増美『とっておきの英語: 第一線同時通訳者の秘蔵話』毎日新聞社 2002年  
村松増美『リーダーたちのユーモア』PHP 研究所 1999年